

輸血セルフチェックリストを利用した安全な輸血実践への取り組み

◎藤村 亮輔¹⁾、北尾 時輝¹⁾、田中 里波¹⁾、松本 文乃¹⁾、増田 順治¹⁾、田中 由美子¹⁾、橋ヶ谷 尚路¹⁾
焼津市立総合病院¹⁾

【背景】輸血に関するインシデントを見直す機会があり、インシデントの中には、「輸血製剤が病棟に2時間放置されていた」、「血液製剤バックが破損し血液が漏れ出ていた」、「輸血開始前の看護師によるダブルチェックを行わずに輸血を行った」などの報告があったため、病棟看護師に対して院内での安全な輸血を実践するための知識の周知と指導を必要とした。【目的と方法】病棟看護師が院内輸血マニュアルのどの項目に対して理解度が低いか確認するため、必要最低限の項目を整理しセルフチェックシートを作成した。病棟看護師に自己評価してもらい、3段階に数値化することで理解度を評価した。評価をもとに院内輸血監査時に指導を行い、また院内広報誌による回覧を行うことで理解度の上昇に努めた。【結果】院内輸血監査の対象先である17病棟を年間使用単位数別に以下の3つに分けて12項目で合計24点を満点として評価した。①300単位以上RBC輸血が行われている3病棟を「普段から輸血が行われている病棟」、②100単位以上300単位未満の9病棟を「時々輸血が行われている病棟」、③100単位未満の5病棟を

「ほとんど輸血が行われない病棟」とした。その結果、①は3病棟すべてが20点以上、②は9病棟中3病棟のみ20点以上、③は5病棟中1病棟のみ20点以上だった。

【考察】①、②、③で比較した場合、輸血の使用単位が少ないほど理解度が低かった。そのため、普段輸血が行われていない病棟への周知と安全に輸血を行う為の講習会や勉強会が必要であることが解った。理解度が高かった病棟でも引き続き周知を行い、インシデントが起らないように活動していく必要がある。また、毎年新人看護師が入ってくるため、引き続きセルフチェックを活用して知識の周知と指導を行う必要がある。